

大同総兵姜瓖とその反乱

はじめに

周知のように明末清初は中国史上大きな政治・社会的変動期に当り、激しい戦乱が続いた。結局は満州族の清朝が、北京を陥して明を亡ぼした李自成をさらに駆逐する事により「正統王朝」への足場を固めるきっかけを得たのであるが、その中で様々な階層の人物と集団が時代の不安定な波にもたせられつつ、生き延びるための基盤を獲ようと努めていった。激しい時代の波は中国全土に広がり、地域・時間によってさまざまな様相を呈していた。明末清初の戦乱と聞けば誰もが思い浮かべる華中・南における復明抗清運動も些細にその実態を視ると多くの問題を含んでおり（抑も抗清Ⅱ復明という図式が全てには該当しない点の問題である）、その詳細についての記録も膨大である。

小論では十七世紀中葉の山西北部に基盤を築いた姜瓖と

史苑（第四八巻第一号）

渡辺 修

いう一武人の生涯と彼の抗清の蜂起を諸史料を通して視る事によって、この激動期の意義をより正確に考察してみたいと思う。

なお全体を反乱以前の姜瓖の動向を記した第一章と、順治五・六年の蜂起の始末を述べた第二章に二分して論ずる。また史料は第一章では『明史』・『順治実録』・『明清史料』を中心とし、第二章は『順治実録』・『明清史料』の他山西及び陝西の一部の地方志、『交山平寇本末』等を主とした。小論の性格上、軍事行動の顛末についての記述が多くなり、また一々出所を記さなかった点を了承されたい。

第一章 甲申年（一六四四）前後の

山西の情況と姜瓖

一、明王朝下の姜瓖

姜瓖の伝記史料としては清の国史館で編纂した『逆臣伝』⁽¹⁾

大同総兵姜瓖とその反乱（渡辺）

がある。これによると彼は榆林の人で明朝末期に大同総兵（原文は「宣化鎮総兵」とするが誤）に至ったとするのである。『國權』巻九十八によると、彼は崇禎十五年（一六四二）六月戊辰（三十日）に征西將軍・都督僉事の肩書で大同総兵に任ぜられている。これ以前の彼に関する記事は筆者の日にした範圍の史料では見当らず、従って総兵就任以前の経歴は不明である。就任以降の行動については、まず『明清史料』乙編六本五一七（以下「乙・六・五一七」）のように記す、『兵部題「大同総兵姜瓖塘報」稿」、崇禎十六年三月十八日付）によると、彼は当時北直隸（河北）の滄州に在って、前年末より長城内に侵入した清軍への防衛に当たっている。ただし直接交戦したのではなく、ゲリラ的戦術として糧草を焚いて敵の兵餉を欠乏させ、さらに毒草・毒米・毒酒を用意するよう提議しているのみである。やがて清軍が引上げると任地へ戻る。

同年冬、李自成が河南より潼関を経て西安を陥し、さらに陝西各地に派兵する。その一部は榆林にも至り、激戦の末十一月二十七日これを陥落させた。榆林は多くの武將を生んだ地で、姜瓖の故郷でもあるが、この時彼の一族が同地に在ったか否かも不明である。やがて陝西全省が李自成の手に落ち、隣接する山西も嚴戒体制に入った。李の先鋒は十二月中旬黄河を渡り、二十一日平陽府を陥した（『明

史』巻二十四、莊烈帝本紀による）。

姜瓖は十二月十五日に発した塘報（甲・一・三九「鎮守大同総兵姜瓖塘報」）において、李自成が軍が府谷を攻略したと知らせ、「賊の東犯」に備えて撫院（大同巡撫衛景瓖）と会同し、副將馮顯祚を大同の西の乃河・井坪堡へ派遣したと報告している。ただ右の塘報でも触れられているが、当時兵卒への欠餉が慢性化しているため彼等には已に戦意がなく、むしろ李自成軍を「迎接して入城」させるケースが増していた。これらの兵卒に対し明への忠節を第一とする官僚は「大義」を論ずるのであるが、これのみで腐敗した明朝を支持させる事は出来なかった。総兵として多くの部下を持つ姜瓖は当然かかる状況を熟知していたのである。

崇禎十七年正月、李自成は西安を発し、黄河を渡って山西に入り、二十三日平陽に入城した（『康熙・平陽府志』巻三十四、兵氛）。二月二日に汾州に至り（『明史』巻二十四、莊烈帝本紀）、ついで七日、太原を陥落させ巡撫蔡懋德が死ぬ。李は十五日太原より北上（『順治・太原府志』巻二、災異、寧武大戰）、そして寧武において西安を發つてより始めて総兵周遇吉による頑強な抵抗を受けた。結局勝利は得たものの多大な損害を被ったため、一説によると李は軍を陝西に引返す事も考えたが、その時相次いで到着

したのが大同総兵姜瓖と宣府総兵王承胤の帰順を告げる使者であった。⁽²⁾

二、李自成政権下の宣府・大同と姜瓖

(1) 李自成への迎降——大同

前述のように李自成は刻々と大同に近づいていった。これに対して大同の明の地方官の措置を見てみよう。『明末農民起義史料』の北行稿第一二八九号（四四七頁）の「兵部為「大同」寇患迫已切膚等事」に見える代王伝燭の奏によれば、大同の人心が動揺し流言も起こっている中、姜瓖が領兵して出城し、恐らくその留守中の二月十九日に巡撫衛景瓖・道員朱家仕・餉臣（戸部郎中）王弘祚が代王府で城守を議している。やがて姜と宣大總督王繼謨が大同へ到り、関廂に駐兵する（以上代王の奏）。姜が大同へ戻った日は乙・六・五九八（註（2）参照）によれば二十三日であり、翌日改めて衛景瓖が送った馬兵も李自成との戦闘を避け、二十六日に引返して門外に屯した。また大同では城門は閉じられ、文書の往来も城壁の上から縄を使って行なったとする。

以上によれば姜瓖は二月十九日以前に督撫の命により寧武総兵周遇吉を援けるため西へ赴いた。しかし実際には敵と戦いもせず、まだ周が生存していたであろう二十三日に

大同へ引上げている。戦意を持たぬ兵卒への配慮もあらうが、むしろ大勢は已に決したと判断し、抵抗する事で生ずる彼自身の損害を恐れたのである。ただ姜本人は大同へ帰っても、一部の部下は寧武附近で周と李自成の死闘を觀望していたに違いない。そのため李自成が苦戦して辛うじて勝利を獲たその日の夜、姜の帰順の使が到ったのである。同様に宣府総兵王承胤の使者も姜のそれにやや遅れて到り、迎降の意を明らかにしている。⁽³⁾

大同・宣府に帰降の意があるのを知った李自成は軍を進め、三月一日頃大同に着いた。そして何らの犠牲なしにこの要害の地を手に入れたのである。

李自成が到着する以前に、姜瓖は衛景瓖が李と同じく陝西出身（韓城の人）である事を吹張して代王との仲を離間し、一方で衛の足疾を理由に城守の権を自分に委ねさせている。また兵卒には銀を与えて懐柔に努めているが、これも彼が大同の軍民の心が已に代王や巡撫に象徴される明朝を離れ、李の軍を喜んで迎えようとしている点を察しているためである。李の大同入城については、二月二十九日とするもの（『順治・雲中郡志』巻十一、外志、逆変）と三月一日とするもの（『明史』巻二十四、莊烈帝本紀等）があるが、恐らく到着が二月二十九日、入城が三月一日であろう。『明史』巻二六三、衛景瓖伝では「至三月朔、賊抵

城下、環即射殺永慶王、開門迎賊入」とあり、城門に駐していた彼が、共に守禦していた宗室の永慶王を殺して李を迎え入れたのである。衛は騒ぎを聞いて衙門を出たところを捕えられ、降服の勧告を拒み自縊し、軍民に怨まれていた代王以下の宗室はその殆んどが殺された。

大同陥落の知らせは三月三日陽和の宣大総督王繼謨のもとに届いた。乙・六・五九八によると王は二月二十七日姜と共に大同城下に駐しているが、その直後陽和へ引返したのである。ここでも大同の報がまだ到らない三月一日に城内の將士・人民が迎降を企て、王がこの日官員たちと血盟し、大声で「大義」を説いても「諸人は黙々と虚応」するのみであった。やがて各將官も姿を消し、兵卒は倉庫を劫掠したり逃亡するための馬を奪いあう。督標の將士が王に対し李への降服を献策してくる有様で、王繼謨は明朝の威は全く地に落ちていた（壬・六・五九三「兵部行」御前堯下宣大總督王」題稿）。

前述のように姜瓖は李自成の大同無血入城のため尽力したが、その直後李より受けた待遇は意外なものであった。『甲申伝信録』卷二、疆場裹革、大同の項によると「瓖既降、復入延闕、闕入、即縛瓖、命斬之、而数其罪曰、朝廷以要害重鎮寄若、若何首降、瓖無辞」とあり、闕、すなわち李自成は姜を機会主義者として、その迎降を評価してい

と迎降を密約していたものと考えてみた。⁽⁴⁾

李自成は姜瓖を陽和に留め、自身は姜瓖の先導によりさらに東し宣府をも陥した（『明史』卷二十四、莊烈帝本紀では三月十一日、『乾隆・宣化府志』卷三十四、世紀下に引く『宣鎮志』では十三日）。宣府では巡撫朱之馮と正月に任命された総兵王承胤、さらに監視大監杜勲が守備に当たっていた。しかし王承胤は前述のように先に李自成に帰順を約しており、朱之馮が官員と死守を誓っても人心はとうに散じていた。杜勲も朱に降服を勧め、拒絶されると笑ってその場を去ったという。李の軍が近づくに杜勲は出城してこれを迎え、やがてその先導で部隊が城下に着くと王承胤が予定通り門を開き、軍民も「結綵焚香」して帰服を表明する。憤懣やる方ない朱は、左右が逃亡を勧めるのも聴かず、遺表を草して自縊した（『明史』卷二六三、朱之馮伝）。

李自成は宣府に権將軍黃應選・防禦使李允桂を残し（王承胤・杜勲は李に従い京師へ向かう）、彼等は大順政権の方針どおり地方官や郷紳から財物を「擄掠」したが、その被害者の中に朱之馮の前任の巡撫で退任後も留まっていた李鑑がいた。彼は後李自成が山海関で敗れると、郷紳と共に蜂起を行なうのである。

こうして李自成が北京に入城した頃、宣府には黄應選、

ない。ところが、李の部將の張天琳（過天星とも称される）が「首降」を殺すと以後の帰順が期待できず、京師（北京）を取る事もできないと諫めた。李もこれに従って姜を釈放し、張天琳に大同を鎮守させた。姜が張に叩謝すると張は「国家創業、招徠固應如此、何敢当謝」と答えたという。

(2) 李自成への迎降——陽和と宣府

李自成は大同に六日間留まった後、東進した。『順治・雲中郡志』卷十二、外志、逆変によると、三月六日李の兵は陽和に到って一泊し、副総兵姜瓖と道員于重華が降る。王繼謨の名が見えぬのは逃亡したためと思われる（『明季北略』卷二十。前述のような状況では抵抗しても無駄であったろう）。『甲申伝信録』（卷六、赤眉寇略）では「初八日、瓖為前驅至陽和、陽和將士悉降」とあり、姜瓖はまた新たに李自成のため功を立てたのである。陽和を守っていた姜瓖は姜瓖の兄弟であり、崇禎十五年十一月甲申に保定総兵に任ぜられている（『國權』卷九十八）。なお同じ『甲申伝信録』でも卷二、疆場裹革、大同では瓖と瓖の上に長兄の「姜讓」という者が在って西安で李に降っており、この「姜讓」が陽和へ赴いて瓖に降服を促したとする。「讓」の存在を示すのはこの箇所のみであり、筆者は一応「讓」を無視して、陽和に駐した姜瓖が恐らく前以て大同の姜瓖

陽和には姜瓖、大同には張天琳がそれぞれ鎮守して大順政権による統治を開始していたのである。

三、「偽官」誅滅と清への帰順

一六四四年（明の崇禎十七年、清の順治元年、李自成の永昌元年）の三月より四月にかけ、北京では李自成の入城、大順政権の正式発足、明の官僚よりの財物追取等の一大変革が見られた。四月十三日には山海関に駐して屈服しない呉三桂を討つため李自成が北京を離れた。実はこれより先の九日、清の摂政王ドルゴンが大軍を率いて明境へ向っていたが、李自成の軍中にこれを知る者はなかったようである。二十日にまず李自成が、その夜には清軍が山海関に到り、翌二十一日に戦闘が行なわれ、清と呉三桂の連合軍に敗れた李は二十六日北京に戻った。そして二十九日皇帝を称し、三十日早朝西へ落ちのびて行った。

山海関の戦いの結果は最初「呉三桂が李自成を破って崇禎帝のために仇を復した」という内容で各地に伝わった。四月中沈黙していた宣府・大同の官紳も明朝の復興が今にも実現されると感じたであろう。李自成が敗走してしまえば、現地で統治に当たっている大順政権の官吏はごく少数であり、これを覆すのはさほど難しくはなかったのである。

(1)「偽官」誅滅——宣府

「李自成敗る」の報は北京から順次西へ流れていった。まず宣府の状況を見ると、『乾隆・宣化府志』卷三十四、世紀下によれば、在籍総兵王応暉・殉難総兵楊国柱の弟某・原任同知程紹孔が紳士・兵民と蜂起を謀り、李鑑をその中心にまつり上げた。そして崇禎帝のため喪に服し、自殺した朱之馮を改葬し、李自成下の官（偽官）を捕え殺したのである。『罪惟録』伝卷十二中、朱之馮伝によれば、この時李鑑の得た兵は数千、挙兵の期日は五月五日とする。彼等が殺したのは権將軍黃應選・防禦使李允桂等十五人であるから（『清史列伝』卷七十八、李鑑伝）、この他に兵卒がいたとしても数的には李鑑等の勢力に及ばなかったであろう。李鑑はこの起事の経緯及び「安撫事宜」を北京に上奏し、ドルゴンはこれに対して「意を加えて招集防守」するよう命じている（『順治実録』卷五、五月己酉。以下『実録』と記す）。

起事は成功したものの、以後の北京の情報が伝わらないため、「李自成一の軍が来て復讐する」、「敗れた李自成一が西走して宣府に来る」との流言もあり人心は依然動揺していた。李鑑も一時延慶州に匿れようとしたが、たまたま清朝の檄が届いたため、耆老兵民は冊を持ってこれに帰附したのである。東からの檄が満洲族のものとは意外であったる

うが、李自成一の退去は彼等にとってその不安を埋めて余りある安堵であったに違いない。

後宣大総督に昇進した李鑑がこの挙兵の際、功があった官紳の名を中央に報じている（丙・五・四八三「宣大総督李鑑啓本」）。これによると「謀主」は李鑑、程紹孔（後に分守口北道となる）、王応暉及び監生李大生等であり、他に懷来では糧斤の童可選（後巡冀道）、永寧では知県丁之竜、保安では張弘紀等が起義し、さらに西協副將張世耀等が起事後の鎮定に当たったとする。また起事の日をここでは五月八日とし、翌日までに李自成一の置いた官をみな捕えたとする。李鑑は五月十七日、改めて清より宣府巡撫に任命され、その山西経略に賛画していくのである。

(2)「偽官」誅滅——大同

宣府にやや遅れ大同でも蜂起が行なわれ、姜瓖が重要な役割を果たした。先に李自成一に随って北京へ赴いた姜は、四月三十日の李の出京の際の混乱に紛れ単騎大同へ向かった。しかし大同には張天琳の兵が駐しているため、彼は陽和へ立寄り、姜瓖の部下を借りてから五月十日大同へ到着し入城を要求した。姜瓖が呉三桂に与した事を疑い開門を拒むべしとの意見もあったが、張天琳は彼が戻ってきたのは勤王のためであるとして入城を許した。これが災いして、姜

は入城直後張を捕えて斬り大同の主に戻り咲くと共に、旧部下と付近の李自成一の官を一掃してゆく。

例えば明の大同左營副総兵王鉞は姜瓖と張天琳等を「協同恢復」し、さらに姜の指示で寧武へ赴き、この地の安撫に当たっている（この時以前周遇吉が所持した山西総兵官の関防を得る）。また丙・五・四六九、「原任大同東協副將王大業揭帖」に見える王大業も姜の部下で、大同の東の天城（天鎮）から清に投順する。この他に姜に協力した者として副將王進朝・王世明・姚拳等が挙げられる。

このように姜瓖が大同総兵に復すと、かつての部下が周辺で起事し、寧武・代州一帯（太原府北東部）も呼応したが、なお太原府には李自成一の部將陳永福が拠っており、姜もこれとの全面対決は控えていたようである。

なお姜瓖の起事に関して注目すべきは明の宗室（襄強王）を擁し明確に明の復興を名分とした点である。李自成一は大同等の代王府の宗室を多く殺しているため、その生き残りをより立てる事は李に対し強い反感を抱いている有力な官紳の支持を得るために必要な手段であった。

しかしこの措置は新たに北京に乗り込んで来た清朝には見逃しがたい。姜瓖が大同の恢復と清への帰順を知らせ、同時に襄強王に明の祀を嗣がせたいと提案したのに対しドルゴンはこれを不満とし、明の宗室には国政・軍務に干預

させぬ旨を強調した（『実録』卷五、六月壬戌）。また丙・五・四九四、「記註殘葉」によると、姜は招撫の際に崇禎の年号を記した劄を与えており、この点もドルゴンの不興を買った（『記註殘葉』については後述）。これを知った姜は七月初め具啓して自から罪を認め罷免を求めたが、ドルゴンは「洗心易慮」を命じ、総兵の任に留めている（『実録』卷六、七月庚子）。

ドルゴンの（六月壬戌の）報書を受けた姜瓖は荒廃した大同地方の民を撫するため六ヶ条の建議を行なう（丙・五・四〇一、六月二十四日付）。その内容は①夏税・秋糧の徴収を二割減とする。②府・州・県の公費が乏しいため中央よりの籌画（約一〇八万両）を要求、③募兵の費用としての銀（約一六万両）を要求、④戦馬を充実させるための財政措置をも要求、⑤人心を知る郷貢・旧臣を起用し、武官も現任の者を「照旧任用」する、⑥残存の明の宗室に米を給し「耕種自食」させる、というものである。八月六日には、李自成一に占踞されたもの明の宗室の房産を民に与えて耕種させ、租税を徴収すべしとする（『姜瓖為处理被農民軍查分的明宗室房産事啓本』、『清代檔案史料叢編』第六輯、一三二頁）。

このように大同一帯は姜瓖等の働きにより清の版図に属したのである。清廷は同地への統治を徹底させるため、五

大同総兵姜瓖とその反乱(渡辺)

月二十二日吳惟華(もと明の勲戚、応襲恭順侯。ドルゴンが北京に到った時に最も早く帰順)に「招撫宣大山西」の任務を与えた。彼は六月十六日出京し、保定・龍泉関を経て五台・代州方面へ向かう。また六月十四日、清廷は固山額真葉臣に八旗兵を率いてなお李自成の余党が抛る山西中・南部の平定を命じた。

四、清の山西平定

李自成が北京を退いた後、清軍の一部と吳三桂はこれを追い慶都及び真定で敗った。李軍はさらに西走、固関より山西に入ったため清軍は追撃を止め北京へ引返した。李自成はしばしの休息を得たのであるが、彼が北京へ攻めのぼる際には率先して降った山西の州県の一部(榆次・太谷・定襄)は、今回敗走しつつある部隊に対しその入城を拒んだのである。怒った李自成はこれ等の城を陥し、拒守した士民を虐殺する。その後李は太原・平陽を経て陝西に入り、六月以後は韓城に駐留していた(『懷陵流寇始終録』卷十八。なお『清代檔案史料叢編』第六輯「吳肇昌報陝西山西軍情請調滿兵駐平蒲事啓本」八一三六頁Vによると、李はこの年十二月頃にも韓城に在ったようである)。太原府には前述のように陳永福を留め、また甥の李過(彼は北京から西走する際に山後即ち宣府・大同地方を経由したという

營の際は「分番直更」が必要というものである。ドルゴンはこれに対し大軍が山西に進んでいる事を伝え、呉も共に功を立てるよう励ます。

ドルゴンはさらに保德州に拠っている唐通(もと明の総兵、李自成に降ったがその敗走時に別行動をとり山西西北部に到る)に白から書を送り帰順を勧めた(『実録』巻七、八月辛酉。書簡の原文は『掌故叢編』に収める)。この親書をもとに唐通との交渉に当たったのが宣大総督吳肇昌と山西(寧武)総兵高勲である。二人は八月十五日懷来でこの件について相談し、九月三日、代州より都司寧承芳に高勲の手紙を持たせ保德州へ遣った。七日に着いた返信で唐の婦命の意が明示されていたという(丙・五・四三二、「山西総兵高勲揭帖」。唐通は八月頃より李過と戦闘をくり返しており、ドルゴンが彼に帰順を勧めたのもかかる情勢を察知し、吳惟華の「征西五策」の第三条のように唐の勢力下の保德州・府谷付近より黄河を渡り、陝西へ兵を進めるためである。やがて九月十五日、唐の帰誠の表文が北京にもたらされた(『実録』巻八。唐はその忠順の証しとして、清軍を導いて米脂を破り、李自成の父祖の墳墓を毀し、その親族を殺した)。

先に山西へ向かった葉臣・巴哈納等の清軍は太原府を囲んだが、攻城に伴なう被害を恐れて漢軍の紅衣砲の到着を

△『懷陵流寇始終録』卷十八V)は延安府に在って、唐通(保德州・府谷に拠る)や高一功(榆林に拠る)と共に清軍に備えていた。

清廷は前述のように葉臣に出征を命じた。その軍はまず饒陽(北直隸)の土賊掃地王を平定する(『実録』巻五、六月壬午)。七月三日には山東に出兵していた岡山額真的賞羅巴哈納・石廷柱を移動させ、葉臣と合して山西に向かわす。同時に宣府・大同の兵馬を吳惟華の駐する代州方面に派し、七月七日には宣大総督吳肇昌を、十七日には寧武総兵高勲を、十九日には山西巡撫馬國柱(漢軍旗人)を任命した。こうして北京から多くの官員が赴任するにつれて、姜瓖の権限も縮小せざるを得なくなるのは必然である。

これ等の新来の官員はいかに山西を平定していったか。

まず最も早く到った吳惟華は「征西五策」を上奏した(『実録』巻七、八月丙辰)。その内容は①陳永福等を討つため大兵の派遣を求め、吳惟華の配下の兵と剿滅に当る、②吳三桂・洪承疇をして西征軍を統べさす、③李自成の黄河の守備を破るため清軍の一枝は蒲州(平陽府南部)でこれに対し、一枝は保德州より渡河し、延安を経て西安へ向かう、④さらに別軍及び蒙古兵を辺外より延安・寧夏の界を通じて陝西西部へ進ませ敵の退路を断つ、⑤李自成軍は山隘での伏兵と夜襲を得意とするので、山林では敵を搜剿し、夜

待つ事となった。砲が到ると十月三日清軍は城の北面を破壊し入城する。逃亡する敵に対し各地で掃討が行なわれたが、主將陳永福は東門より南へ走り以後の行方は不明である(『順治・太原府志』卷四、災祥、砲取太原)。新任巡撫馬國柱は早速衙門にて政務を執り、吳惟華は太原総兵となる(後十一月二十六日に回京)。清兵の主力は李自成軍を追って各地へ赴く。巴哈納・劉之源等は汾州から平陽へ、さらに平陽府西北の黒龍関へ到り、平陽府内の大順軍は陝西方面に退却したため山西の大半は清の版図に属したのである(『実録』巻十一、十一月壬辰では石廷柱・巴哈納が汾州・平陽の平定と康元勲等の降服を知らせる)。清廷はさらに敵の本拠地西安を衝くため十月十九日、アジゲを靖遠大將軍として出陣させた。この軍は宣府・大同を経て延安へ進み、十月二十五日定国大將軍となったドドと共に李自成を夾撃するのである(後述)。

なお清の潞安府・沢州への経路について触れておく。この地域は山西の東南部に在って北直隸・河南と地を接し、李自成が山西に進入した際にはその部將劉芳亮が潞安府城を陥した。その後同じく劉忠が拠っていたが山海関の敗報が至ると撤退していった。士民は民間に匿れていた明の通判馮聖兆に冀南道の事務を委ね、沢州より北上して来た清軍(葉臣の部隊か)を迎え、府内に残る李自成勢力の掃討に

当った。しかるに葉臣等が太原へ向かった後、先に退いていた劉忠の兵が再び城を包囲する。馮は固守して時をかせぎ、十月に援軍が近づくと劉忠は再度退却していった（『乾隆・潞安府志』巻十一、紀事）。

五、アジゲの西征

アジゲの西征について述べる前に、これと平行して行なわれた山西における清の施策を順治元年末までについて一瞥したい。清は太原府城攻取により同府の大部分、平陽府北半、汾州府全域をほぼ手中にした。黄河近くの太原府西北では唐通が真先に帰順し、十一月十六日定西侯に封ぜられる。しかし唐の拠る保德州周辺では李自成軍の残存勢力があり、清軍による駆逐が必要であった。

また平陽府南部（蒲州付近）にもなお大順軍が出没していた。太原を獲た直後の清軍にはこの方面への徹底的掃討を行なう余裕が無かったが、十二月二十五日には先に出陣したアジゲ・ドドに呼応するため、固山額真阿山等を蒲州へ送る。この兵はまず平陽府城に駐し、韓城の李自成と対峙しつつ機を見て蒲州より陝西へ進む手筈となっていた。

一方で葉臣等の武力を背景に明の地方官紳や李自成下の官への招撫も行なわれていた。葉臣や巴哈納に対して十二月二十七日に論功行賞があったが、この時漢軍の八人の固

山額真全員が賞銀を受けているのは太原を攻略するに当たっての紅衣砲の役割を評価したためであろう。また布政使以下の地方官も十一月十二月にかけて揃い、清朝の民政が開始される。

さてアジゲの出征について述べると、北京からは異親王マンドハイ・謙郡王ワクダ・吳三桂・尚可喜・李國翰等がこれに従う。まず宣府に到ったが、ここでアジゲと巡撫李鑑の間に確執があった。始め李鑑が赤城道朱寿鑒の不法を弾劾しようとしたため、朱は旗人綽書泰（官名は不明）を通じてアジゲに贈賄して救いを求めた。アジゲは朱の罪を宥すよう圧力をかけ、宣府に着いた際改めて朱の釈放を要求したが李鑑は従わなかった。アジゲはなおも綽書泰や柳溝総兵劉芳名を介して李を屈服させようとしたが、この経緯は北京のドルゴンの知る所となり、審理の結果朱と綽書泰が殺され劉芳名は革職となる。この事件は西征と直接関係はないが、アジゲの驕慢と李鑑の忠良を世に印象づけた（順治二年正月にドルゴンは李鑑に賞賚を与えた）。

宣府でのアジゲの本来の任務は当地の武官を従軍させる事である。丙・五・四六九「榆林総兵王大業掲帖」によると、宣府副総兵康鎮邦が西征に参加し、また王大業自身（もと大同東協副將）も陽和で遠征軍に加わって、全軍は十二月初め大同に到った。

大同では主將の姜瓖が従軍する。機会主義者の姜はアジ

ゲに巧みに媚びたであろうが、ともかく宣府・大同の兵を合した清軍はさらに西して保德州に達した。ここでは唐通がアジゲに帰服し、その力を背景に付近の招撫を開始した。甲・一・九十九「定西侯唐通稟啓」では、アジゲが到った時点で木瓜園・鎮羌・孤山・永興・神木県・高家堡・大柏・油柏林堡・建安堡が帰順し、清軍が去った後も黃甫・清水堡が、さらに十二月十二日には葭州も降り、残るは河堡營と唐家会のみとなった。唐は清軍に糧餉を給し舟を用意して黄河を渡らせ、同月二十日にこの任務を終えた。後続が渡河するうちに前鋒は進み、王大業は同じ日米脂に着き（丙・五・四六九）、二十一日に延綏総兵を委署される。

黄河を渡った清軍は二手に分かれ、アジゲの本隊は延安を囲み、その陥落後に南下して西安へ進撃する事となった。他方姜瓖等の宣府・大同の兵と唐通は榆林の高一功を包囲する。榆林を囲んだ諸軍は姜を推して総督とし、王大業（署延綏総兵）・高勲（寧武総兵）・康鎮邦（宣府副総兵）下の兵をも指揮する事となった（丙・五・四六九）。姜がこの地位についたのは明朝以来総兵として在任が長く、また榆林出身で地の利に詳しい点も理由に入ろうが、恐らく最終的には姜の媚びを受けたアジゲの意向が反映しているのである。榆林を囲んだまま年を越し、順治二年正月十

四日、清軍は常楽で高一功を敗り、十六日に懷遠堡に入城、姜はさらに波羅漢で敵軍を破った（『乾隆・懷遠堡志』巻四、紀事）。『康熙・延綏鎮志』巻五之二、紀事志によれば、正月十五日清軍が榆林に入り、高一功等は遁走する。また丙・五・四七九「定西侯鎮守保德州總兵唐通啓本」では官兵（アジゲが委署した延綏巡撫趙兆麟を主とする）と唐通が十四日夜榆林に入城し、十六日に姜瓖・康鎮邦・王大業が到着したとする。ともかく榆林は清の手に落ち、唐通はこの後アジゲを追って延安へ向かった。

一方アジゲは延安で李過の激しい抵抗を受けて南下が遅れ、その間にドドが正月十一日潼関を破り、十八日李自成が逃亡した直後の西安に入る。この報が届くと李過も潰走し、アジゲもこれを追って西安に達したがその日付は不明である。ドルゴンは二月八日の論でドドを江南に往かせ、アジゲには李自成追討を命じたが、この際アジゲの西安到着が遅れたのはオルドス地方で駱駝や馬の需索を行なったためとする（『実録』巻十四）。しかしドルゴンは進軍の遅延よりも、アジゲが宣府で李鑑に圧力をかけた事を強く咎め、二月十日にはこの事件を奏聞しなかった宣大総督吳華昌を罷免し、後任に李鑑を昇格させた。アジゲへの降罰は特に行なわれてないが、非が彼にある事をこの処置が明示している。

アジゲは李自成を追って湖広まで至るが、ここではその経緯には触れない。二月十六日、清廷は平陽に屯していた阿山等をド下の南征に従わせ、平陽には漢軍の任徳功が宣府・大同の兵と留まった。

こうして甲申の年（明の崇禎十七年、清の順治元年）の正月に李自成が山西に入ってから一年が過ぎた。その間山西は三つの政權に支配されたが最終的には清朝が全域を掌握する。そして巡撫馬国柱以下の地方官のもとで秩序回復が謀られるのだが、当時南方では明及び李自成の勢力が残っており、山西でもこれに應ずる土賊や一部の郷紳の活動が継続した事は『実録』や『明清史料』等からもうかがわれるが、その概略については後述する。

六、甲申の年の姜瓖とその功罪

ここでは姜瓖の反乱について述べる前に『明清史料』丙・五・四九四「記註殘葉」によって、甲申の年の動向に関するドルゴン（＝清朝）の評価について見てみたい。

「記註殘葉」は順治二年七月二十一日昭徳門内における姜瓖への「承旨伝問」の有様を記している。これによればドルゴンは①姜瓖が帰順後も部下に崇禎の年号を書いた割を与えていた点、②東強王を擁立した点、③大学士馮銓への贈賄の三点に関し詰問を行なっている。①に対する姜の

の党として明代から盛んに攻撃された馮であるが、この掲帖では「たとえ魏党であってもその罪は偽官よりは軽い」と居直っている。

甲申の年の姜瓖は政權交替の変動の中を巧みに泳いで保身に成功し、大同総兵の地位を確保したのであった。しかしそのために明では衛景瓖等が、大順政權では張天琳等が犠牲となっている。共に華北の大勢がそれぞれ李自成、清朝という新政權に有利であったとは言え、一戦を交えるより迎降したり裏切ったりする事で生き延びようという姿勢に対しては文官の輿論が冷たくない筈がない。姜瓖としては最初李自成に降るのが兵民の意志に沿っており、後には天命が清に下っていたから帰順したのだと言い逃れたかもしれない。しかし現在は清王朝の地方官の一人であり当然現王朝への忠義が最優先されねばならない。ここで問題になるのが自己保身を第一にしてきた過去の行動であり、この「習性」が果して清の恩と威により消除させる事ができるとは限らない点である。この点を十分考慮しつつ姜瓖を留任させた清朝の立場も微妙であり、中国統一への過程がなお険しい段階では彼のような武官も利用価値があったのである。しかしその対策は南方が略定されるにつれて当然変更が予想されるのである。

答は、彼が清に帰順する以前は李自成に対抗するため宣府・大同・山西の広い範囲を崇禎の年号で招安しようとし、また空名の割を与えて名前・年・月は皆本人に書かせていた。呉惟華が到り姜の管轄地域が大同付近に限られたため、従前の割を取り戻す事ができなかったとする。②については弁解の余地もなく「もと忒心あらず」と言うのみであった。またドルゴンの旨を伝えた剛林等の言では、アジゲが大同に到った際姜は明の朝服（「向朝束帯」）で出迎えたともされる。ただ大同一带を平定にした姜の働きは「功罪相い準」ずるもので、清廷としては往事を追究しない、よってなお総兵の任に留めるとの沙汰であった。

③の馮銓への贈賄も事実であったが、これについては丙・三・二七三「内院大学士馮銓掲帖」に関連記事がある。この史料は御史呉達に弾劾された馮が自から罷免を求めたものであるが、そこに列した（自分の）罪に、姜瓖が故なく贈物をした際馮はこれを恥としたが、呉達は姜の贈賄を馮の「索取」が原因とし（『歴史檔案』一九八一年四期、「馮銓被劾案」中の「浙江道監察御史呉達題參馮銓本」）によれば、馮は姜が帰順した時「封拜」を認めるのを条件に銀三万両を求めたが、姜が簡単な贈答ですませたため大いに機嫌を損ねたとする。弾劾を行なった。このように受け取られるのは自分の人望が軽いためであるとする。魏忠賢

第二章 姜瓖の反乱（一六四八～四九）

一、反乱までの山西の情況

前述のように順治二年初頭に山西全域は清の版図としてほぼ確定した。しかしそれ以降順治五年十二月の姜瓖の反乱に至るまで一部の地域では依然反清の動きが継続していた。この点は『実録』と地方志より作成した表Ⅰでも理解できよう。これによれば各地の蜂起はいわゆる土寇と邪教に大別できるが、実際には起事集団中に両者が混在しており、またもとの明の宗室や、表Ⅰには見えないが一部の士紳の参加もあったと思われる。ただこれ等の反乱は分散的で相互の連携に欠けていたため官軍の個別撃破により鎮定される。また蜂起の形態も山寨に拠る事が多く、州県を攻める、より積極的な行動に至るものは少ない。

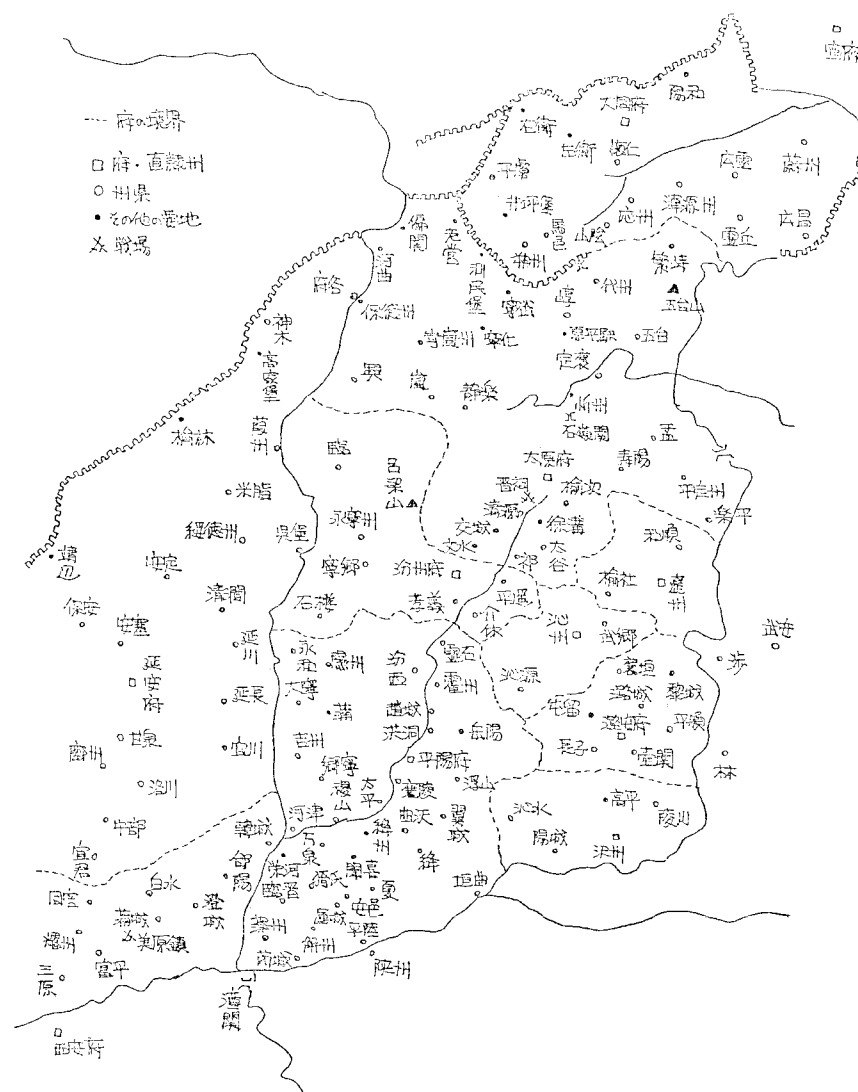
この点以下に述べる姜瓖の反乱は蜂起の範囲が広く、また当初清軍が大同方面に引きつけられたため、各地の反乱軍は積極的に州県を攻めて清の官吏を殺し、別に官を置いた。その幹部は姜の部下、一部の郷紳や土賊等より成るがその多くはねばり強く抵抗し、その結果回復後の清兵による虐殺も甚しかった。各地方志はほぼ口を揃えて「姜逆」の乱の被害が李自成のそれを上回った点を指摘するが、そ

表1 順治2～4年の山西の反清の動き

順治二年	3月11日	蔣家峪の民「善友会」を組織。利民参将王守志これを搜掠→激変さす。のち王守志伏誅(『実録』巻15)
	閏6月27日	嵐県の土寇を剿平(『実録』巻18)
順治三年	3月22日	山西の僧劉光溥・雷贊化・任仲雲、聚党し謀叛を計画→伏誅(『実録』巻25)
	7月	張五・王小溪(1,000人)反す。副将程姓、遊撃蕭姓が平定(『乾隆・垣曲県志』巻4兵防)
順治四年	5月	邪教高飛・凌尚万等石炭に拠り叛。平陽・潞安の營兵が平定(同上)
	6月16日	中朝紀(山西巡撫)の奏:郷寧の民楊春暢、左道惑衆し衆に拠り反す。平陽副将范承宗が平定する(『実録』巻32)
	9月	孟県・五台県にて李化龍反し孟県を攻。冀寧道王輔・参将李好賢が解困(『乾隆・孟県志』巻2天文、丙-7-623「山西巡撫祝世昌揭帖」)
	10月27日	絳州の賊鄭登啓、稷山の北山馬嶺廟に拠り大成教師と自称。妖僧の王月天・王明・朱梅川(宗室)・劉騰蛟等と不軌を謀る→斬(『実録』巻34)
	(4年)	屯留の王国寧、取丹教を唱。知県孫奎の父孫光耀が平定(『光緒・屯留県志』巻2兵防)
	(4年)	邪教高飛、王希堯(1,000人)陽城の腰盆照壁等の館に拠る。生員王洪藻、道員武姓に呈策して平定(『康熙・陽城県志』巻7祥異志)

史苑(第四八巻第一号)

これは清軍の過酷な弾圧があった事実を暗示する。
順治元年着任した初代巡撫馬国柱は土賊の招撫に努め一応の成果をあげた。今、招撫に応じた彼等が再び反するまでを交山(太原府の西へ北一帯の山岳地帯。頼家度の「呂梁山」農民起義軍的抗清闘争「入中国農民起義論集」五十年代出版社、一九五四、所収Vに言う所の呂梁山)の情況を例として述べる。甲申の年の前後、李自成の部将王剛(後李に随い西安に去る)と共に活動していた交山の「土賊」任亮・巴山虎・王董英・郭彦・李叔孔・王全等は順治二年馬国柱の招きに依りて撫に就き、将兵として太原營に属していたが、馬の昇任に伴って江南へと遷っていった。彼等の故郷の交山一帯は地が瘦せて耕作に適さないため、住民は鳥鎗で鳥や獣を捕獲し、或は木材の伐採・馬匹の放牧等により生計を立てていた。ところが順治五年八月丁未(十五日)朝廷から民間での畜馬及び銃器の所蔵を禁ずる命令が下され(『実録』巻四十)、交山の民に大きな衝撃を与えた(この禁令は反乱さなかの六年三月撤回される)。加えて巡撫道王昌齡標下の千総路時運が禁令に乘じ財を貪ったため、憤った民の梁四(『道光・太原県志』巻十六、遺事では堡兵とする)は張継成・王顯明・齊三夏・張成志等と路を殺し、静安堡の兵民と造反に立ち上がった(『交山平寇本末』(以下『本末』と記す)によれば九月)。彼等



大同総兵姜瓖とその反乱(渡辺)

大同総兵姜瓖とその反乱（渡辺）

がさらに太原千総温師珩の兵をも敗ると、各地でこれに同調する者も現われた（静楽の武安宇・永寧州の李崇孝・裴家馬坊の武拳裴奇芳等）。王昌齡は参将賈恩・守備苗成龍と交山を討ったがまたも梁四・張成志等に退けられた。

たび重なる官軍の敗戦に驚いた時の巡撫祝世昌は満州旗人の艾松古・遊撃高国盛等二千の兵を送る。反乱軍はゲリラ戦で抵抗したため官軍も長圍を築きつつ各路よりの援兵（寧武副将李吉・老營参将羅映壇・汾州参将寧猷功・撫標遊撃李好賢）の到着を待つ。彼等が到ると十月二十五日（『本末』による）に二路より山地に入り、李吉・羅映壇が裴家馬坊を陥して裴奇芳は自刎、王顯明・武安宇は逃亡した。王昌齡下の軍中に在った奇芳の叔父裴四はこれを聞いて脱走し再び馬坊で叛く。一方寧猷功は姜瓖が送った遊撃高之蛟等と龍王山の李崇孝の寨を毀し李を捕えた（この後高之蛟は大同へ戻る）。さらに十一月、李好賢が煉銀山の山寨を陥し、梁四・張成志を殺す。官軍が静安堡へ戻ると先に逃亡していた王顯明が尤玉（もと把総。路時運が殺された際反乱軍に参加）と汾州を攻撃中との報に接した。そこで先鋒の兵を出発させ、本隊も文水に到った時、祝世昌よりの急使が姜瓖の突然の叛を知らせたのである。援兵の殆んどは太原に引返し、参将賈恩が王顯明に備えて交城と文水に駐する事となった。

続いている情勢を見た上での計画的行動であろう。ドルゴンも五年十二月二十七日の内院への論で、姜は自分の不正を知りつつ詭言をまいて乱を起こしたのであり、他の官員がその「煽惑」に乗じて罪を犯さぬよう訓戒し、一度叛いても帰降すれば許して旧業に復すと付け加える。また六年正月十六日には大同城内の民に対し、官軍は決して罅みを解かず紅衣砲で誅戮すると威嚇し、姜を捕縛、あるいは殺して来帰するよう勧めている。

姜瓖の反乱は、彼の甲申の年の行動を熟知する者には、その時と軌を一にした機会主義的な行為と映ったであろう。前述の「記註残葉」からも窺われる如く、清廷は姜を決して信用しておらず、また彼自身もその事を十分知っているのである。さらに反乱の原因は順治五年末当時の清の政策にも関連する。彼が清に帰順した頃には依然西安の李自成、南京の福王の両政権が存在していた。しかし以後数年間に李自成・張献忠は死亡し、福王・唐王の政府は滅び、華中・南にも清朝の勢力が浸透していく。統一への最終段階を迎えた清にとっていわゆる「武臣」のうち、一時はその協力が必要としたが今に至るまで必ずしも心服していない官僚——特に兵権を持つ武官——に対し徐々に厳しい拘束を加える必要があった。

順治四年以降特にこうした武官への圧力が強まり、それ

史苑（第四八巻第一号）

以上の『本末』の記事により、任亮・李叔孔等かつて李自成と連合した著名な土賊がいなくても、姜瓖の反乱以前に交山中心にかなり大きな蜂起があった事がわかる。以下には姜の反乱の原因・経過について順次記してみたい。

二、姜瓖の反乱の原因

姜瓖の反乱の原因については不明な点が多い。『実録』巻四十一、順治五年十一月癸未によると、ドルゴンはハルハの二楚虎爾が清の境界に向かってしていると聞き、アジゲ・ボロ等に大同を戍守させ、十二月辛卯にはワクダ等をこれに加えた。同書巻四十一の十二月戊戌（八日）の記事では、姜瓖が十二月三日に叛き、清軍が四日に大同を囲んだとする。十日ドルゴンは姜に書を送り、今回の用兵は蒙古に対するもので汝とは関係がないとし、姜のかかる行動は「姦人の煽惑」が原因であろうと推測し、もし今すぐ帰誠すれば罪を宥すと言明する。後六年三月、ドルゴンが自から大同へ赴き使者を遣って降服を促した際、姜は返書の中でアジゲ及び各官が「凌民」したため、兵民が自分を脅して叛かせたものとし、ドルゴンが全城の民を「開誠肆赦」するよう求める。

姜瓖が部下や兵民に強いられて已むを得ず叛いたとは信じ難い。恐らく中国全土にわたって反清復明の気運がなお

表Ⅱ 順治4～5年の漢人武官

4年4月20日	蘇松提督呉勝兆謀叛。督標の将官高永義等呉勝兆を縛り洪承疇のもとへ解（『実録』巻31）
6月9日	投誠総兵高進忠兵器を藏匿し仮辦を使う一伏誅（『実録』巻32）
6月18日	襄陽総兵王光恩有罪逮問、弟王光代謀叛（同上）
6月24日	呉勝兆伏誅（同上）
5年2月9日	江西総兵金声桓・王得仁等南昌にて叛。「隆武」の年号を使用（『実録』巻36）……のち6年正月23日（『実録』巻42）平定
10月25日	総兵劉沢清、山東曹鼎の賊と結び不軌を謀る。弟姪等と共に伏誅（『実録』巻40）
11月4日	広東総兵李成棟叛し南雄より江西贛州を攻（『実録』巻41）……のち6年3月25日（『実録』巻43）平定

※ 日付は全て『実録』の記事のもの

に対して彼等の不満も増し、各地の復明勢力との結託を図るケースも起こる。この企てが発覚すれば清廷は遠慮なく彼等を抹殺した。清朝政権の確立のためにはたとえ迎降及びその他の軍功があったにせよ、跋扈する漢人軍閥の存在は許されない。順治四年頃から姜瓖の反乱までの間に不穏な動きを見せた漢人武官については表Ⅱを参照。このうち五年の金声桓・李成棟の復明運動への参加の意義は大きい。二人はそれぞれ江西と広東で反し、広西の桂王政権に臣事した。やがて李成棟の軍は敗れ、金声桓も六年正月南昌で投水して死んだ。⁽⁶⁾ 華中・南のこの情況は当然姜瓖にも伝わっており、桂王政権(別に魯王も一隅に拠っている)がなお命脈を保ち、なおかつ大同にも近い交山一帯では清兵が叛民を相手に苦戦している。かかる現状を観察した上で姜は清への反抗に踏み切ったのであろう。

ただ筆者が感ずるのは、機会主義者でソツのない姜瓖にしては、起事の際の措置が疎略な点である。後にも触れるがアジゲを中心とする大軍が大同へ近づいている時に叛くのは、時機を得ていないのではないか。また叛いた際清の総督耿焯等はアジゲを迎えに城外に出ている。反清復明の旗幟を掲げるのなら耿等はすぐに殺さねばならない筈である。恐らく姜は清廷が自分の秘かに抱いていた異志を悟り、彼を捕えるためアジゲ等を派遣したと解釈して、草率のうち

に城に拠ったのであろう。反乱の直接の動機は結局「自己保身」のためとみて良いのだろうか。

反乱の原因をまとめると、姜瓖が異志を常に抱いていたという事の他に①なお各地で止む事のない反清復明の動き、②清廷による漢人武官への圧力、さらに③姜瓖自身の機会主義者としての心理をも付け加えられよう。

以下には姜瓖の反乱の勃発及び山西・陝西(北部)への進展について地域ごとにその経緯を記したい。

三、反乱の勃発

(1)大同とその周辺

姜瓖が叛いたのは順治五年十二月三日である。この日は宣大総督耿焯等の官員が到着間近い清軍の兵糧の検査のため出城した留守に城門を閉じて反旗をひるがえした。耿焯は陽和へ走り(耿は革職され、後山東巡撫に復したが貪官として有名であった)、大同に向かっていったアジゲは報を聞いて駆けつけ、四日に城を囲む。姜の拳兵に対しその部下が拠る各城堡も一斉に呼応し、十二月丙午(十六日)の『実録』に載るアジゲの奏では大同付近の十一城が皆叛いたとする。地方志等によると左衛・右衛・渾源州・応州・山陰・馬邑・朔州・平虜(魯)衛・井坪堡等が姜に応じた事がわかる(表Ⅲ)。なお『清史列伝』巻五、梁化鳳伝に

表Ⅲ 大同府各城の失陥と清軍の回復

地名	失陥の日付	首謀者	回復の日付と様子
大同府	順治5年 12月3日	姜瓖	順治6年 8月29日 楊振威帰降
左衛	5月12日	姜建勳	6年4月 アジゲが破る
*右衛	"	"	6年8月? 迎降
渾源州	"	方応祥・唐虎	6年3月 ドルゴンが破る→屠城
*応州	"	張祖寿(?)	" ドルゴンに投誠
*山陰県	"	顔永錫(?)	" "
*馬邑県	"	"	6年8月 朔州破城後帰順
朔州	"	張盈	" マンダハイ等破る
*平魯衛	"	"	" 帰降
井坪堡	"	周世徳	" 馬世徳拒守するも守備高世仁納款帰降

* 「被脅」により反乱にくみした州県

※ この他懷仁県……守城 蔚州・広靈……不明

『交山平寇本末』に拠れば広昌・靈丘……6年2月劉遷に應ず

よると郭二用が陽和に拠り、アジゲに従った梁がこれを回復したとするが、呉偉業の撰した「梁宮保壯猷紀」(『梅村家藏』巻二十五所収)に梁が復したのは許堡であるとするのが正しいであろう。

大同府の各城堡では姜瓖の部下が積極的に反乱に加勢するケース(渾源州・朔州)もあるが、多くは勢に迫られたいわゆる脅従に属している。前者は表Ⅲでもわかるように清軍に対し頑強に抵抗した。渾源州では宝峯寨に住む方応祥(本名朱克灼、もと明の宗室、国変に遭い舅の姓を名のる)が副將の劄を受けて起事し、清の守備唐虎も同調して知州梁爾奇を傷つけ(十二月二十日)、やがて殺した(『康熙・渾源州志』巻下、叢紀志、叛逆)。朔州では姜の部下姚姓(姚拳か)の攻撃に守備張益が内応し、道員宋子玉・通判楊遠・知州王家珍を殺す(『雍正・朔州志』巻八、武備、兵氛)。また左衛で叛いた姜建勳(『本末』では姜建雄とする)の軍はこの後太原・汾州府へ南下していく。

なお大同城の攻防は以後長期にわたった。当初清側は攻城に際して最も効果的な武器である紅衣砲を使用せんとし、十二月中旬巴顔等が北京より運んでいった。ところが漢軍官僚の伝記を見ると、紅衣砲は朔州・渾源州・左衛の作戦には威力を発揮しているが、大同においては城壁が堅固なためかその効果が現われず、後には専ら包囲によって

大同総兵姜瓖とその反乱(渡辺)

食糧補給の道を断ちつつ城内での内応を待っていたのである。大同恢復後、ドルゴンの命令で城壁を一部破壊させたのもこの包囲戦での教訓によるものであろう。

(2) 太原府北部一帯

大同近辺の諸城堡に続き、寧武偏関一帯も姜瓖に応じた。以前交山の王顯明等を剿していた副将李吉は剿の変を聞き寧武へ引返したが、その部下で秘かに姜の割を受けていた劉偉等は五年十二月十八日起事し、李吉と道員金元祥を殺した上姜建勳の兵と合流し崞県を攻撃した。この他にも老營参將羅映壇・利民参將劉秉鉞・偏関署参將張柱石等が姜に帰付する(『本末』)。特に偏関では明の兵部尚書万世徳の孫の万鍾が偏関道と称し、参謀として反乱に加わる(『道光・偏関志』巻下、戊子己丑事変考。これによれば万鍾の妻孫氏が薙髮令に憤激して夫をして姜瓖に挙兵を勧めさせたという)。また保德州では姜に応じた都司牛化麟が知州や士紳を殺して叛き(『康熙・保德州志』巻九、付記)、崞嵐州では州民郭彦武が城に拠り、他に興県・嵐県・河曲等が反乱に参加した模様である。

寧武の陥落を知った山西巡撫祝世昌は巡寧道王昌齡と参將賈恩を大同へ遣り援兵を求めた。一行が崞県南の原平駅に至ると、崞県を囲んでいた姜建勳と寧武の叛兵がこれを

阻み、賈は敗れて降り割辮(辮髪を切ること)を強いられた。王昌齡は原平を守ったが、その部下の劉永忠・張斗光が内応して王を反乱軍に引渡し殺させる。この後姜建勳は忻州と定襄を取る(知州劉德炎・知県暢悦は迎降)。反乱軍が太原に迫る勢になったため、祝世昌はたまたま駐防の任を終え陝西から北京へ回る途中の固山額真阿頼(蒙古旗人)に協力を求める。これを了承した阿頼及び李賢の軍は、南下してきた姜建勳を石嶺関で破り、その逃げるのを追って忻州城下へ到った。『本末』によると六年正月十一日夜、姜等は忻州から寧武へ走り、反乱側に降った賈恩・劉德炎・暢悦は再び清に投降したが、後太原で斬首される。

一方太原府東北部の代州・五台ではもとの明の参將劉選がこれも姜瓖の割を受け友人の郎枋(郎芳・郎方とも記す)と学兵し繁峙を陥した。これを知って五台県の民張五桂・高鼎、靈丘の民韓進臣・張新等も反乱に参加し、さらに忻州で敗れた劉永忠も合流したため五台・靈丘・広昌等の州県が反清軍の手に落ちたのである(『本末』及び『康熙・五台県志』巻八、祥異、兵革)。ついで劉選と郎枋は代州を攻めたが、ここには章京艾松古と遊撃高國勝が駐し、一時は関廟(外関)にまで進入した劉選の兵(約三万という)に対しよく城を固守した(『八旗通志初集』巻一六一、艾松古の伝)。やがて大同からボロの率いる援軍が到着し(六

年正月十八日)、反乱軍を敗って郎枋を斬り代州の包囲を解いた(甲・六・五一六「山西巡撫祝世昌塘報」、『清史列伝』巻二、ボロ(博洛)の伝)。以後この地方の反乱軍は山寨に拠る作戦を採り、劉選は繁峙東南の黄香寨に、高鼎と劉永忠は五台山の曹家山寨に入った(なお『本末』では代州の攻防を四五月の頃とする誤。『実録』巻四十二、正月癸未の条に代州の囲が解けたとの報告がある)。

次に清側の反乱に対する措置を述べると、まずアジゲを平西大將軍とし(この事は『実録』には見えない。『清史列伝』や『八旗通志初集』の彼の伝による)ボロと大同を囲ませ、またワクダに渾源州を囲ませた。六年正月、前述のようにボロが代州を救援し、やがてまた大同へ戻る。またドルゴンは正月四日に郡王ニカン(定西大將軍)に太原を救わせた。ニカンは阿頼と共に太原より北上し、忻州・崞県を経て寧武に到り、劉偉の軍を破って先に反乱軍に降った羅映壇を清に寝返らせた。その後も寧武の包囲は続いたが、二月下旬ドルゴンの大同への親征が実行されると、ニカンは軍を撤し、ドルゴンに呼応して新たに朔州・左衛の包囲を担当したため危機にあった反乱側は息をつく事ができた。そして姜建勳の軍は寧武より南下、静楽を経て交山の王顯明等と合するのである。

(3) ドルゴンの親征

順治六年二月十四日、ドルゴンは自から大軍を率いて大同へ向かった。長期化の様相を見せる大同攻防戦に決着をつけ、反乱の他地域への波及を阻もうとの意図であろう。彼の軍は三月一日桑乾河畔に到り、この日渾源州へ、三日には応州へそれぞれ帰順を勧める論を送った。これに答えなかった渾源州の敵に対しドルゴンは四日、紅衣砲により激しい攻撃を行なった。この様子を『実録』(巻四十三、三月癸亥)では単に「多爾袞拔渾源州」と記すのみであるが、地方志によれば、一月余りの包囲の後、三月四日に砲が城の東北隅を破壊し清兵が城内に突入した。反乱軍の首領方応祥は街巷で力戦して「乱刃のため磔」せられ、唐虎は西門楼上で自焚、余党は皆殺された。「城中黎庶、屠戮八九、婦女半為俘獲、房舍焚拆幾尽、鄉村擄掠一空、兵燹之慘、未有甚于此者」(『康熙・渾源州志』巻下、叢紀志、叛逆)とあるように抵抗した城に対するドルゴンの報復は厳酷を極めたのである。

これに驚いた応州と山陰ではそれぞれ参將張祖寿と知県顔永錫が軍民と投降した。たまたま北京で留守をしていたドドが危篤との報が到達したためドルゴンは回京し、大同の包囲はアジゲにより続行される。四月初めアジゲは左衛を恢復したが、『光緒・左雲志稿』巻一、天文志、祥異に

大同総兵姜瓖とその反乱（渡辺）

「（順治）六年、姜瓖叛逆、城遭屠戮」とあるのを見ると、渾源州と同じ運命を辿ったのであろう。この後アジゲは北京に戻り代わって貝子吳達海等が大同を囲む。

四、反乱の発展

前述のような大同及び太原府北部での反乱の長期化につれ、その近隣でも反清の動きが活発となり、順治六年三月四月頃には山西全域と陝西北部（ほぼ延安府全部）が戦乱の舞台になる。

(1) 陝西北部（延安府）

黄河を挟んで大同の西に位置する延安府北部では榆林に駐する延綏巡撫王正志が姜瓖の兵の西進を阻むため、総兵沈文華と延安参将王永強（（8））を黄河沿いの地に派遣した。この頃神木では廃将高有才が高家堡の田秉徳・張秀等に擁立され（『康熙・延綏鎮志』卷二十八、名宦志）、王も秘かに彼等と消息を通じていた。六年二月、王は突然榆林に向け撤退を始める。これを見てその異志を悟った沈文華は後を追ひ、神木に到ったところを高有才に襲殺された。高は神木を陥し、道員夏廷印・同知楊大士・知県徐之龍等を殺す。一方王永強は榆林に着くと「姜瓖の兵が渡河したため戻った」と詐って入城し、続いて高有才の兵が城

下に迫ると城門を開いて内応したため、王正志は自縊し、榆林道孫士寧は「從逆」する（『実録』卷四十三、三月丁卯八日）。王

王永強は南下して延安府へ向かい、甲・三・二九二「延綏巡撫董宗聖揭帖」によると、二月二十一日府城に到り、城内での王永強（王永強の同族か？）の内応もあってこれを陥した。同時に府城以北の綏德州・府谷・安塞・保安・宜川等も呼応し、葭州には平徳（平四とも記す）が拠る。平徳の軍は後黄河を渡って三月九日石楼を取り（黄進禄が拠る。丙・八・七一七「山西巡撫祝世昌揭帖」）、臨県にも到る（丙・八・七二五「山西巡按蔡应桂揭帖」）。王永強の軍は南下を続け鄜州・宜君・中部・同官等を陥した（『実録』卷四十三、三月丁卯・辛未）。この事態に清では漢中に駐防していた吳三桂と李国翰に出動を命じ、三月二十一日蒲城をも手に入れた王を迎え撃つ事となった。

三月二十三日午刻、北上した清軍は美原鎮で王永強軍に遭遇した。吳三桂・李国翰・李思忠等の精鋭より成る清軍は敵を大破して宜君・同官二県を復し（『実録』卷四十三、三月丙戌）、四月五日には蒲城をも回復してこれを屠った（『康熙・蒲城志』卷二、祥異、屠城。なお『実録』卷四十三、四月丙申八日Vの記事では蒲県を復したとするが、蒲城の誤まりであろう）。こうして王永強の南進は阻止さ

れたが、彼等は黄河を挟んだ山西の反乱軍とも連絡を保っていたようである。以上により陝西北部の反乱の担い手も武官が中心であった点が想像できるが、この地域の地方志の記述が簡略なため、その他の反乱軍の構成分子について明らかにするに至らなかった。

(2) 山西中部（太原・汾州府）

山西中部（太原・汾州府）の反乱の発展は姜建勲の活動によるところが大きい。前述のようにドルゴンがニカンに寧武の包囲を解かせたため余裕を得た姜の軍は、静楽を経て交山に到り王顯明を首領とする農民軍と合流した。『本末』によれば姜はここでその幹部に割を与え（王顯明↓総兵、齊三夏・閻虎↓副総兵、王□不詳↓参将、鐘明節↓守備）、彼等のうち精勇な者を選んで作戦を続けた。この時太原では主な將領は皆大同へ動員されていたため、祝世昌は已むを得ず、姜瓖の義子の参将呂繼盛を交城へ派し反乱軍に備えた。然るに案の上呂は敵と通じ、三月十四日（『本末』）交城は敵の手に落ちる。姜建勲・劉秉鉞等は清の知県を殺し、交山の人燕化鵬を知県とした。続いて破った文水でも静楽の人蘇国化を知県に任じ、ついで四月十三日（『本末』）及び地方志では四月二日とするが、ここでは丙・八・七二六「山西巡撫祝世昌揭帖」による）には姜建勲、

王顯明及び陝西から来た平徳（吳三桂等の圧迫を受け黄河を渡ったものか）も加わって汾州府城を攻撃し、把総沈海等の内応（丙・八・七二六では守南道中軍部鄭名標が開城し、軍民と割辯したとする）もあり、これを陥す。ここで論功行賞を行ない姜建勲は巡撫、劉秉鉞は冀南道となり、内応した沈海・徐虎山等は参将と称した。勢いに乗った反乱軍は太原府の祁県・清源・徐溝・太谷、汾州府の孝義・永寧州・平遙等を支配下に収めていく（また平陽・潞安兩府においても後述のように呼応の動きが顕著となる）。

こうして交山の部隊をも含む姜建勲の軍が南から省城に迫ってきたため、祝世昌は急遽大同の軍營に援兵を求めた。そこでボロが定西大將軍となって応援し、大同の包囲は左衛からニカンが移って担当する。急行したボロは太原府城の南の晋祠堡近くで反乱軍に遇った。姜建勲に従った交山の兵士は鳥鎗で清軍を悩ませたが、ボロは敵しく部下を督し、苦戦の末敵を破る事ができた。清軍は晋祠堡内に退いた反乱軍を囲み、姜建勲が南門より交山方面へ走るのを追って多くの兵を殲滅した。この戦闘で王顯明・尤玉が死亡し、鐘明節は交山へ、姜は汾州府へと退却した。ボロはその後順次反乱軍の拠った州県を回復する。

この晋祠の戦闘は姜瓖の反乱の成否を左右する重要な決戦であったが、その正確な日付は殆んど史料に記されて

表IV 潞安府反乱の状況

地名	失陥の日付	内 応（首謀）者	反乱軍側の官	回復の日付
長治県 （潞安府）	順治6年 6月3～4日	李世雄・張国威 苗雲峰・吳亨福 王永祚・李桐等	姜振（巡南兵備道） 朱慎鐸（知県） 楊秉忠（知県） 王者佐（知県）	順治6年 10月9日 九仙台へ 11月4日 屠城（王者佐逃）
長子県	5月29日	迎降		
屯留県 襄垣県	5月27日 5月28～29日	郭天祐 李述孔・李名閔 劉炎祚・劉康胤等	張鳳羽（知県） 趙浩（知県）	6年10月 6年11月
潞城県 黎城県	6月1日 6月4日		李師沆（知県） 胡寅（知県）	〃 6年10月
壺関県 平順県	6月3日 6月1日	胡式訓	胡宓（知県） 董琇（知県）	6年11月 6年10月

武官…郭天祐＜総兵＞劉繼漢＜守備＞（潞安府）

趙聯芳＜副将＞（壺関県）

李成喬＜守備＞（平順県）

以上 丙-8-772「山西巡撫劉弘遇殘題本」に拠る

※『乾隆潞安府志』卷11紀事に見える「起事」の諸人

沈烈（＝沈海）陝西の人 副総兵と自称 のち総兵と「自陞」

許守信 陝西の人 〃 〃

喬炳 参将と自称 のち副将に「自陞」

胡国鼎 徽（州？）の人 監軍道と自称 のち巡撫に「自陞」

郭天祐 把総 屯留で内応 副総兵となる

張国威 潞安の「叛兵」潞安で内応 参将（の中軍）となる

吳享福 〃 潞安で内応 〃 となる

いない。前掲の吳偉業の「梁宮保壯猷紀」のみが五月十五日頃に晋祠堡の北で戦いが行なわれたとする。ただしこの時姜建勲が戦歿したと述べているのは誤まりである。

(3) 山西南部——潞安府

四月十三日の汾州陥落は省城（太原）と西南の平陽府及び東南の潞安府・沢州との連絡を遮断する助果があった。このため両地方の土賊の活動も盛んになったのである。山西省東南部（潞安・沢州）では姜建勲が晋祠に迫った四月下旬頃、まず沁州一帯の州県に反乱軍の任じた官吏（偽官）が出現して士民に迎えられたのを皮切りに、各地で起事と内応が続発し潞安府の全州県が反乱軍の手に落ちた。今この経過を一々述べるのは避け、各城の失陥と回復の期日、反乱軍側の官吏の姓名等を表IVにまとめた（丙八・七七二「山西巡撫劉弘遇殘題本」による）。反乱軍側の官吏の大半は清より寝返った者で占められる。彼等は十ヶ月に各州県が清軍の手で回復されるまで約

半年間統治を続けた。

沈海・郭天祐がこの地方の反乱側のリーダーである事が表IVでもわかるが、『本末』によれば沈海は姜建勲が汾州を攻めた際に内応した人物である。そして晋祠の戦闘で姜が敗れた時、沈は汾州へ戻らず平遙・沁州を経て張斗光（もと王昌齡の部下）と会し、潞沢参将周詔の守る屯留県を攻略したのである（この時郭天祐が周を縛り迎降する）。沈海はさらに潞安府城へ進み、李世雄等の内応を得て入城し、巡道劉沢溥・知府楊致祥を殺した後、府内の州県を降し官を設けていった。また張斗光と土賊陳杜は沢州付近で活動を続けた模様である。

(4) 山西南部——平陽府

汾州失陥は平陽府でも大規模な反乱を招いた。この地方では土賊に加え、有力な郷紳が叛いている点特長がある（李虞夔・李建泰・劉三元等）。このうち平陽府城は王永強に應じた平徳が五月に囲んだが城内の官民が固守し、また梅勒章京譚布が救援したため落城を免かれた。府城の西方及び北方には王永強の部隊の進出が目立つ。例えば永和県では陝西から至った龐武生が城を攻め、これに土賊衛敏が応ずる（この他蒲県劉嗣向、隰州の王登賢が著名な土賊として挙げられる）。なお『清代檔案史料叢編』第六輯「韓

代等為農民軍攻克平陽府屬襄陵等題本」（一六六頁）によると平陽府北部では洪洞・趙城・蒲県・靈石・岳陽・汾西等が反乱軍の手に落ちたようである。

平陽府の西南、蒲州方面では虞胤が挙兵して閭部と称し垣曲・聞喜では郭中傑が勢いを振い、平陸では李虞夔が城に拠った。『実録』卷四十五、八月癸巳によると虞胤は桂王永暦の年号を奉じており、明末寧夏巡撫であった李虞夔も恐らく同様であったと思われる。

このように平陽府では土賊と一部の郷紳が挙兵し、特に南部（蒲州を中心とする）でその勢いが盛んであった。府城以北の動乱は姜建勲の進出と陝西の蜂起軍の渡河により引きこされたが、南部のそれは郷紳が中心となり表面的には姜建勲との接触はなく、むしろ復明のため桂王に應ずる形態をとる。山西北部では武官が反乱を指導し、郷紳としては偏関の万鍊しか見当らず（彼自身も仕官はしていない）、他は迎降した清の官員が名目上反乱側に加わっているのみであるが、ここでは李建泰・李虞夔のような大学士・巡撫クラスの有力郷紳が叛旗を翻している点は注目すべきである。

五、清軍による回復

清軍は晋祠での勝利を契機に各方面で反撃に転じた。ま

ず太原府の諸州（太谷・徐溝・交城・文水・清源・祁県）は六年五月内に回復され、これにより一時汾州・太原府南部・沁州・潞安府北部にわたっていた反乱軍の「領域」は東西に二分される。ボロを中心とする清軍は汾州府の姜建勳の打倒を優先させたため、潞安・沢州地方の沈海等はしばし余命を保つ事ができた。また平陽府南部の反乱軍に対する陝西からの孟喬芳の攻撃（後述）も七月下旬・八月下旬まで実行されなかった。

清側で最も早く反乱軍を破り戦局逆転を導いたのは延安府での呉三桂・李国翰軍である。彼等は前述のように三月二十三日、美原鎮の戦いで王永強を敗つてその南下をくいとめ（その後王は蒲城・丙・九・八〇五「延綏巡撫董宗聖題本」もしくは宜君・八「道光・鄜州志」巻一、輿地志、紀事・道・戦役）、勢いに乗じて北上し、五月に延安府城、六月に綏德州、七月に榆林を奪回した。呉三桂と李国翰は六年冬までに陝北の反乱軍の残部をほぼ蕩平したが、高有才の拠る府谷とこれと黄河を挟んで対する保德州（牛化麟が拠る）の二城が固守したため、清兵はこれを包囲し孤立させていった。

(1) 大同とその周辺

大同府では四月にアジゲが左衛を陥してよりなお大同・

姜之芬、偽兵道孫乾・高奎が遁走したと記す）。清兵の殺戮を見て馬邑は降服し、井坪堡・右衛・平虜（魯）衛も同様に降付した。

八月二十五日、アジゲは再び北京より大同へ赴き、ニカンと共に包囲に当る。ところが二日前の二十三日、兵・食とも尽きた大同城内から姜瓖の偽総兵楊振威が部下の劉宝を秘かに送り清への帰順を約した。この時の言に「我等原係良民。為逆寇姜瓖迫脅而反、大軍来围大同、即欲斬逆瓖帰順。奈力有不及、故爾遲延。今兵民饑餓、死亡殆尽、余兵無幾。我等問計於各官、裴季中等二十三人、与我等合謀約斬姜瓖帰順」（『実録』巻四十六、九月戊午（二日））とある。アジゲとニカンが「姜瓖を斬つて降れば恩養する」と答えると、楊振威等は二十八日に姜瓖とその兄の琳、弟の有光の首級を持ち来献した。そして翌二十九日清軍は大同へ入城したのである。ドルゴンは楊振威等二十三人とその家族・部下計六百人を来京させ、残りの「從逆」の官吏・兵民は皆殺戮し、さらに大同の城垣を城壕より五尺低くさせた。これを見ても姜瓖の八ヶ月以上の籠城（順治五年十二月・六年八月）は堅固な城壁があつて始めて可能であつた事がわかる。

同じ頃マンダハイ等は朔州より移動して寧武を攻めた。

『清史列伝』巻三のワクダの伝によると、偽総兵劉偉と偽

朔州で籠城が続いた。この間戦火が山西全省に拡大し清軍がその対応に追われたため、この方面では大きな動きはない。ただ『実録』巻四十三、三月丙戌の条では、祖馬路・得勝路よりの五千の兵が大同救援のため到り、姜瓖も城内から撃つて出たが、当時アジゲと共に大同を囲んでいたボロ等が奮戦して援軍は敗れ、姜も城内に退いている。やがて汾州が陥落するとボロは南下し、ニカンが交代する（『実録』巻四十三、四月乙卯）。『実録』の同日の条によると北京に戻ったアジゲは「姜瓖に帰誠の意志がある」と進言したため、ドルゴンは改めて赦宥の諭を送り投降を促した。しかし姜瓖は依然降らぬため、六月二十九日ドルゴンは再び親征を決し（七月一日出発）、また親王マンダハイと郡王ワクダの兄弟に朔州と寧武に拠る叛徒の討伐を命じた。もっともドルゴンは七月十四日、遠征半ばで大同行きを中止して帰京し、一部の兵を護軍統領索洪・署護軍統領希爾根と共にマンダハイのもとへ派遣するに止った。新手の清軍の攻撃を受けた朔州はまもなく陥落し、その報はドルゴンが北京へ着いた翌日の八月七日に届いた（雍正・朔州志）巻八、武備、兵氛によると、「王師」が至った時、州民は帰順を望んだが、造反の首謀者張盈が従わず、民を脅して固守したため、砲によって城が破れた後「悉く屠戮に遭った」のである（『清史列伝』巻三のワクダの伝では偽総兵

兵道趙夢龍は寧武関城を焚いて西へ走ったが、姜瓖の死を聞くと抵抗を止め、将官五十余人、兵五千と来降し、静楽・寧化所もこれに倣った。

こうして大同・寧武は平定されたが、万鍊の拠る偏関及び河曲・岢嵐州等太原府西北部では抵抗が続く。しかし汾州を陥し（九月、後述）、さらに潞安・沢州、平陽府南部を鎮圧してすっかり大勢を挽回した清軍の攻撃により、十一月から十二月にかけて皆降った（丙・八・七四一「宣大总督佟養量塘報」）。中でも偏関では「偽総兵」賀国柱が内応して（丙・八・七四一）城内で戦闘が起こり、万鍊とその一族は「満清の為に戮辱されぬことを誓って」（『道光・偏関志』巻下、「戊子己丑事变考」）父祖以来の邸宅に火をつけ自焚したのである。また残る保德州も呉三桂等の長期にわたる包囲のため内変が起き、州民崔耀等が定国公と号した牛化麟を斬つて清の軍営に降ったのである（『実録』巻四十九、七年六月乙酉、『康熙・保德州志』巻九、付記）。

先に代州を囲んだ劉遷はその後清軍に追われて山中に入り黄香寨に拠ったが、清兵は彼を山頂へと追い詰め、七、八月頃これを殺した。また劉永忠・高鼎は五台・孟県・定襄の境の曹家山寨に立て籠ったが、清軍が迫るとまず劉永忠が逃亡し、高鼎も山伝いに北直隸の真定府方面へ走りつつなおゲリラ戦を続行していたが、後に直東豫総督李蔭祖

大同総兵姜瓖とその反乱（渡辺）

が井陘道陳安国を遣って彼を招降させた（順治十一年六月頃。丙・九・八六四「宣大総督馬鳴珮題本」）。

(2) 汾州

汾州は六年四月十三日、姜建勲と交山農民軍により陥落し、割譲した反乱軍に統治される。ついで太原攻略を目指した反乱軍の主力は晋祠で敗れ、汾州に戻って守備を固める。太原府の州県を復したボロは、一時平徳の兵が囲んだ平陽府の救援に軍を割いたが、やがて汾州府内に入り、七月十八日（『梁宮保壯猷紀』）に考義県を恢復した。ボロの軍はこの後も一部が東の榆社・武郷（ともに四、五月頃失陥）に派され、太原府の寿陽、汾州府の平遙の反乱軍の討平に当るなど、しばらくは姜建勲の居る汾州府城を攻める余裕がなかったようである。ドルゴンは朔州・馬邑を平定したマンダハイを汾州へ遣り、ボロを助けて剿平さす（『実録』卷四十五、八月丁酉）。マンダハイは寧武を下した後汾州に到る。九月十三日清軍は紅衣砲で北の城壁を破壊し、十四日朝八旗兵が突入する。逃亡した偽巡撫姜建勲と偽布政劉炳業等は待ち伏せていた兵に殺された。嵐県・永寧州はこの直後帰順する。また同じ頃ボロの軍の一部は抱仏岩に拠った侯和尙（もと明の総兵。一時介休県を陥す）の軍を敗り、汾州回復後はその部将が各地に派され余党の剿滅

に当る。やがてボロ自身は北京へ凱旋し、残った清軍が臨県・平遙・沁州・遼州等を回復し、武郷・榆社も迎降して山西省中部（太原・汾州府）一帯の反乱軍はほぼ跡を絶ったのである。

(3) 潞安・沢州地方

潞安府には六月以来沈海とその一党が拠っていた。その政権には土賊や降服した清の官員、もとの明の宗室も加わっているが、有力郷紳の参加は認められない。汾州に駐していたボロは潞安の北に当る遼州・沁州に官兵を送ったが、このうちたびたび包囲を受けていた遼州には韓岱が到り、反乱軍を剿殺する。また知州姜振と士民が明の衣冠を着て、清の官員を反乱側に引渡した沁州には十月八日、清兵が到着、「焚戮山原、寨谷蕩然」（『乾隆・沁州志』卷九、災異）と称される兵禍を受けた。その兵がさらに南下すると知った沈海は九日城を捨てて沢州へ走る。その後府城を守った偽道員胡国鼎も、包囲されると夜逃亡を謀ったが、清兵はこれを追い胡はじめ多くの敵兵を殺した（十月十日）。十六日清軍は潞安へ入城、反乱側に協力した官員を数日にわたり屠戮する（『乾隆・潞安府志』卷十一、紀事）。付近の屯留・襄垣も降り、この報が北京に至ると、ドルゴンは十月二十五日、ボロとマンダハイを、北京へ帰らせワクダに

沈海の追撃を命じる。残る州県の多くは降服したが、長子県では先に清の知県李允昇を沈海に引渡した土賊衛銀・常寿等が堅守したため、十一月四日清軍が攻め陥すと「無辜の赤子」も含め「殺戮の惨なること甚し」という構景がくり広げられた（『康熙・長子県志』卷一、兵革）。

さらに南下した清軍は十三日陵川県を下し（『偽知県』方洲が投順。丙・八・七四二「山西巡撫祝世昌揭帖」）、さらに沈海・劉繼漢（偽守備、後に偽総兵と称す）・郭天祐等を九仙台（陵川県西南の九仙山か）に囲み投降を促す。もはや逃げ路を失った反乱軍の首領沈海は家族・兵丁等二十七人と案より降ったが、劉・郭はこれに同調せず、清軍の火器による攻撃と半月間の包囲の後、千・把総の割を持つ魏家祥・張希舜等が二人の首級をたずさえ投降した（なお「梁宮保壯猷紀」では九仙台の平定を十二月二日とし、郭天祐等が死亡して始めて沈海が降ったとする）。この他沢州では偽部院陳杜・偽監軍道何守忠が寨堡を攻撃していたが、固山額真石廷柱により捕殺され、陽城に拠った偽総兵張斗光（本県の人）と許守信も韓岱等に剿滅された。こうして順治六年内に潞安府周辺の反乱軍もまた跡を絶つ事となる。

(4) 平陽府

史苑（第四八卷第一号）

前述の如く平陽府南部では郷紳と土賊の拳兵が相次いだ。これに対し平陽府城では自身の保全を図るのが精一杯で、官兵をこの地に送って反乱を鎮圧する余裕はなかったのである。そこで実行されたのが陝西總督孟喬芳と西安駐防の八旗兵による北征である。

順治六年八月、孟喬芳は督理糧餉戸部侍郎顔色・協領根特・督標副將趙光瑞等と黄河を渡り、先に虞胤が陥した蒲州を復し多くの敵を殺した（虞胤は運城へ走る）。さらに臨晋に進んだ孟の騎兵は県の東の令狐村で衛某の軍八百を殲滅し（『康熙・臨晋県志』卷六、災祥、兵氛）、ついで河津も復す（『実録』卷四十五、八月癸巳）。また榮河では根特・趙光瑞が偽師白璋を斬り、騎兵へ赴く途中で偽監軍道衛登万を捕え偽師張万全を殺した。章京杜敏下の満兵は解州を復し、騎兵から聞き向かった根特は偽都督郭中傑を敗り、八千の敵兵を殺す（『実録』卷四十五、八月癸丑・甲寅）等、八月中に蒲州一帯の州県は西安の清軍の猛攻によって奪回され、この後反乱側は險に拠って抵抗する事となる。

清軍が次に目指したのは虞胤と韓昭宣（偽元師）の拠る運城であった。九月二十二日根特・杜敏・趙光瑞がこれを陥し、城内で韓を斬ったが（丙・八・七三五「山西巡按蔡應桂揭帖」）、虞胤の行方は不明であった。また運城包囲が

行なわれていた頃、反乱軍が絳州を開き、岳陽を陥したが、『実録』巻四十六、九月甲戌、後官兵に撃退されている。

平陽府の反清の動きに関連してぜひとも触れなければならぬのは李建泰の動向である。事の起りは清の翼城知県何斯美が曲沃に住む李建泰が倡乱を計画していると祝世昌へ挙首した事に始まる（『実録』巻四十六、九月壬戌、翼城では数年前から「哈々教」徒が蔓延しており、六年にはその余党安定国が郭中傑等と合して城を攻め、また王永強下の兵が城下に押寄せた事もあった（『光緒・翼城縣志』巻二十六、祥異、兵燹）。これ等の戦闘の間に李建泰の謀叛の噂が広まったのであろう。事実曲沃には平陽府城を攻撃した平徳の部下が進入していた（『光緒・曲沃縣志』巻三十二、雜余志、祥異）。

李建泰は崇禎末に大学士・督師となったが何等の功を立てる事もなく保定で李自成に降った。その後清に帰し改めて大学士となったが、順治二年十二月罪により罷免され郷里に戻る。僅か一年半とはいえ清の文官の最高位に在った彼の「起事」は純粹な復明運動とはみなしがたい。『逆臣伝』では彼が曲沃に入った土賊に対し通謀の書を送り、さらに何斯美をも同調させようとしたとする。彼はやがて土賊と共に太平に移るが、その行動は反乱に呼応するというよりむしろそれを自分のため利用しようとしたのである。

う。姜瓖と同様に、明↓李自成↓清と保身の目的で鞍替してきた彼にとって、清軍と互角に戦っている反乱軍と接触を保つ事も保身に必要と考えたのであろうか。かかる両端を持する行為は結局その身を亡ぼす事となる。

この点明の寧夏巡撫の李虞夔は虞胤等の挙兵とはほぼ同時に平陸で起義し、子の李弘と蒲州・解州へ進攻している（『小腆紀伝』巻四十六、列伝三十九八義師）。李虞夔父子の復明の意識はかなり強いといえよう。

運城回復後しばらくは戦局に大きな変化はなく、孟喬芳等は西安に引返し、余党平定はワクダに委ねられた。彼は十一月末頃まで潞安・沢州の鎮庄に当り、後兵を西へ向ける。そして六年内に平陸・芮城が清に復し、李虞夔は河南へ出奔、追い詰められた李弘は崖より身を投じて死ぬ。さらに夏県・聞喜も降り、偽総兵康姬廷が投順した（『実録』巻四十六、十二月辛亥）。こうして年末には反乱勢力は李建泰の拠る太平を中心に、吉州・隰州・郷寧方面の衛敏・王登憲等、さらに垣曲一帯の郭中傑等を残すのみとなる。

順治七年初頭には偽総兵申亥・郭中傑・魏閔（衛敏か）が帰順し、二十余日間包囲されていた太平の李建泰も清に降った。ドルゴンは李を殺しその家産を没収した（『実録』巻四十七、二月甲午）。この結果平陽府全州県が清の版図に復帰したのである。

さきに亡命した李虞夔は七年六月、河南陝州で捕えられた（丙・八・七五六「山西巡撫劉弘遇揭帖」）。ただ虞胤

（陝西の人）や平遙で姜建勲の軍に内応（六年四月）した

劉三元（平遙の人。明の拳人より兵部主事となる）は依然行方知れずであった（甲・四・三九二「山西巡撫白如梅題本」によると順治十三年にも二人の消息は判明していない）。また順治六年五月、郭中傑と共に垣曲を陥した張五

（『乾隆・垣曲縣志』巻四、兵防）は「辺王」と号し章京杜敏の兵と解州で戦う（『実録』巻四十五、八月癸丑）。そして郭中傑が降服した後も平陽府南部の山中に拠っていたが、十二年正月十九日清軍により射殺される（丙・九・八八三「山西巡撫陳應泰揭帖」）。

こうして一時は山西の過半数の州県を陥した一連の反乱も平定され、残るは高有才の拠る府谷のみとなった。ここも七年六月の保徳州の陥落以降孤立し、同年十月呉三桂等により回復され偽経略高有才と先に反乱軍に降った孫士寧等が斬られた（『実録』巻五十一、七月十一月乙卯）。その一ヶ月後、かねてより「有疾」であった清の摂政王ドルゴンも喀喇城で息を引取った（三十九才）。

おわりに

こうして明・清交替の激動期を泳ぎ切った姜瓖も自らが首謀者となった反乱の失敗で逆臣として誅滅された。十七世紀中葉の政治・社会的変動の中で身を全うする事は大小の官員にとって苦難の連続であった。ある者は一王朝に殉ずる事により「名」を獲たが、多くは従来の政権を見捨てて新政権に協力する事で「実」を求めた。もっとも新政権が直ちに正統王朝として安定する訳はなく、初期には政治の大勢も、それに伴う「実」も変化・流動しがちである。大勢はどう移るのか、如何にすれば「実」が得られるかは官僚群の重大な関心の的である。

姜瓖もまた「実」を得ようとした官僚の一人——というより他人の犠牲は考慮せずひたすら自分の「実」と「利」を求めて已まなかった官僚の一人である。機会主義・利己主義者の彼は一政権下の一地方官僚（大同総兵）に甘んぜず、そのため自己の生きた時代に存在した全ての政権を裏切ったのである。そして彼の「利」への欲望を満足させる政権はついに実現しなかった。しかし彼はかかる政権の実現に向けプランを練っていたであろう。このプランはつきつめれば彼自身を首班とする政権を目的としていたといえ

よう。

彼は目的達成に至る過程で利用できるものは全て利用していく。清の入関は彼を李自成の束縛から解放した点で大いに役立ち、交山農民軍の奮戦は彼の反清の行動に少なからぬ援助となった。ただ入関直後と異なり、已に華北・華中及び華南の一部を略定していた順治五年頃の清朝は、姜を始めとする山西付近の反抗勢力のみでは覆えず事はできなかった。彼の起事はその目的において時機がやや遅きに失した嫌いがある。

結局姜瓖が叛いた裏には彼の個人としての野望が大きく影響している。その野望の最終目標が姜氏王朝であるか否かはともかく、いわゆる復明のための行動でない点は確実であると思う。この点頼家度氏が「姜瓖の反清は謀利的是取巧的。它和農民軍的発於民族自衛堅持階級闘争是根本不同」と評している（『呂梁山区農民義軍の抗清闘争』『中国農民起義論集』所収）のは肯定できる。

姜瓖の自立への試みは失敗したが、同様な反乱が約二十年后呉三桂によって起こされている。彼の意識——「利」の追求・自立への野望——は呉にも共通している。明・清交替の混乱期において、大きな兵権と実力を持つ武人はかつての唐代の藩鎮のように「自立」という夢を見やすかったであろう。そしてこれ等武人の跋扈・横行を制し得て

始めて官僚層に支えられた皇帝専制支配が可能となるのである。

註

- (1) 『清史列伝』巻八十にも収める。
- (2) 寧武陥落の日付（それは姜瓖の帰順の意が李自成に伝わった日である）は不明である。『明史』巻二十四、莊烈帝本紀は二月二十九日とするが、これに従うと李自成は激戦直後わずか一日の行程で大同に着いた事となり無理がある。後述の乙・六・五九八「專管大同鎮提塘事張得培報」（二月二十七日付）が已に寧武と朔州が破られたとの情報を載せており、『明史』の二月二十九日説は誤まりの可能性が強い。
- (3) 『明史』巻二六三、衛景瑗伝、『明季北略』巻二十。
- (4) 最近（一九八七）中華書局から刊行された『清代人物伝稿』上編第四巻の姜瓖の伝（張捷夫氏執筆、一八三—一九〇頁）では「姜瓖」の存在を認めているようである。
- (5) 小論中の記述において「偽官」もしくは官職名の上に「偽」字を冠した場合、第一章では李自成政権下の官員を、第二章では姜瓖の反乱に与した者を示している。第二章で頻出する「土賊」とともに本来「」で括るべきであろうが煩瑣になるのを避けてそのままとした。
- (6) 金声桓と李成棟の反乱は彼等が文官（江西巡撫章于天と兩広總督佟養甲。共に遼人）の指揮下に甘んじなかったのもその一因である。金・李の反乱とそれに至るまでの二人の動向については他日稿を改めて考察したい。

- (7) 渾源州の抵抗の様子については古鴻飛・要子瑾編『雁北史話』（山西人民出版社、一九八五）の「方三起義」に詳しい。また同書には「李自成在大同」・「姜瓖抗清」の項もあり、明末清初の姜の動向及び反乱の大概を記しており参考になる。
- (8) 王永強については不明な点が多いが、明末延安付近に駐した武將で、アジゲの西征の際清に帰付しそのまま原任に留まったようである。
- (9) なお「梁宮保壯猷紀」では沈海が謫安方面へ向かったのは汾州が清の手に落ちてより以降（九月以降）の事とする。

補記

小論は筆者が昭和五十六年度後期課程研究報告書として、五十七年（一九八二）二月に提出したものに若干手を加えたものである。当時姜瓖の反乱についての研究としては本文でも触れた頼家度氏の「呂梁山区農民起義的抗清闘争」（『中国農民起義論集』所収）が唯一で、他に謝国楨氏の『南明史略』（上海人民出版社、一九五七、一九〇頁以下）や『清初農民起義資料輯録』（新知識出版社、一九五六、三十頁以下）に概説的な記述がある位であった。また頼・謝二氏の視点は呂梁山区（交山）農民軍の動向を中心に据えており、姜はむしろ脇役であるが、前掲の報告書では姜という一武人の動向が大規模な反乱への拡大をもたらしたと解して小論と同じく「大同総兵姜瓖とその反乱」と題し

たのであった。その後中国で註(4)・(7)で触れた『雁北史話』、『清代人物伝稿』上編第四巻が出版され、姜自身についての記述も増加している。

今後は姜瓖以外の漢人武官（特に第二章の二、で触れた金声桓・李成棟）の明末清初における動向について、他の復明勢力との関わりをも視野に入れつつ考えたい。その作業により改めて清初（主に順治年間）の中国略定の経過と意義を明らかにしと思う次第である。

（元立教大学文学部非常勤講師）